

觀照

12

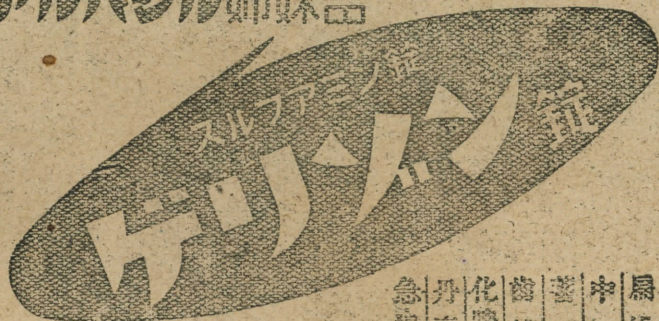
藝能文化雜誌

吉田榮三・榮三郎追憶

昭和二十二年十二月

化膿症に

アルバジル姉妹品



山之内製薬株式会社

扁桃腺炎
中耳炎
歯槽膿瘍
化膿性外傷
丹毒・面疔
急慢性淋疾

観照 (第十二號) 目次

繪 吉田榮三の「烟類」と吉田

榮三郎の「釣女」太郎冠者……

日 井上八千代の「長刀八鳥」

と井上佐多の「菊の露」……

名人榮三を組ぶ……嘉治隆一……

榮三郎の死……大西重幸……

各流藝能觀照會……坂東鏡助……

印象問答……北岸佑吉……

観照……

劇評「王將」の成功……北岸佑吉……

能評……

寶塚館(沼) 山本能樂會(沼)

道成寺と海人(北岸) 定家一

式の習(武智) 鉢木と樂阿彌

(北岸) 井筒と砧(北岸)

井上八千代の露娘……武智鐵二……

編輯後記……

表紙・カット……須田國太郎



「生寫朝顔話」

朝 顔

吉 田 榮 三

新曲「釣 女」

太 郎 冠 者

吉 田 榮 三 郎

「長刀八島」
「菊の露」

井上八千代
井上佐多
三絃 富崎春章

「本誌主催名流藝能觀照會」



名人榮三を憶ふ

嘉治隆 一

「榮三でおます。今日は結構なお相伴をさせて頂きます」——老は會食のとき、初對面の相客がゐれば、必ずさういつて挨拶したものであつた。小柄な人としては不似合な位ひかすれ勝ちの太く低い聲で言葉少く語るのが、いつもの癖であつた。その聲なほ耳朶にあり、而もその温容接するに由なく、神技つひに見るべくもないのである。

「人間はその接する人々の部分々々から出來上るものである」といつた異邦の詩人があつた。一人の人がその一生に何か交抄をもつ人の數は恐らく何千萬にも上るであらう。而もそのうちで一藝一能に秀でた各人上手といへるものには滅多に會へるも

のではない。その意味で私はこの世で榮三老の藝を觀賞し、その人さなりに觸れることが出來たことを此の上もなく嬉しく思ふものである。

また太平洋戦争になつてゐなかつたから、多分、昭和十五年の夏のことであつたと思ふ。明治座で文樂が上京興行をした時、榮三と文五郎の兩老が若手にまぢつて出演したのを憶ひ出す。出しものは中狂言が「合那ヶ辻」で榮三の合那に、文五郎の玉手御前。終幕が「梅川忠兵衛」新口村之段で文五郎の梅川に榮三の親孫右衛門といふことになつて居り、そのどちらの幕であつたか、淨瑠璃を盲駟太夫が語つてゐる最中に突然かなりの地震が揺れ出したことがあつた。すると見物席は殆ど總立ちとなり、氣の早い連中は聲さへ立て、廊下に飛び出したほどであつた。私は舞臺から三分の一位の前座に腰かけてゐたが、ぢつと氣を落ちつけて

座つてゐるさ、榮三、文五郎、駟太夫の三人とも神色自若、いさゝかの動搖も見せず演技を續けて愈々こゝちはなかつた。思はずこれある哉と膝を打ち、隣席の友人に向つて「これこそ、藝道三昧といふものであらう」と私語やきつゝ、三嘆これを久しうしたのであつた。

二

榮三、文五郎兩老の藝臺生活六十年を記念して、朝日新聞が文化賞を獻じたのは、昭和十八年の正月だつたかと思ふが、その推薦の辭で河竹繁俊博士が形容せられた言葉を憶ひ出さずにはゐられない。即ち一は名人にして年中、落着きを見て、色の變らぬ常綠樹の如く、他は上手にして例へば、秋の紅葉のはてな粧ひを凝らしてゐるが如きものであるといふ意味が酌まれた。當時これこそ誠にいみじくも道破せられたものと少

からず心を打たれた次第であつた。

確かに墨繪の濃淡と水彩の丹青と位びの對照が見られ、澁い肚藝と器用な小手元の藝當、内潛的な無表情と誇張的な技巧、何れにより多くの好意を寄せるかは觀る人々の勝手であるが、私自身は人形の遣ひ手が躍らずに、自分の魂と感情とを人形そのものゝ中に打ち込んで了つてゐた榮三の至藝にこそ、より高い達人の境地を認めてゐたといふのが正直な心持である。

とかく人形師の方が華やかな衣裳に身を堅め、面にも體にも表情たつぷりさ、小手先に人形を提げたやうな調子で、主客顛倒、人形遣ひが舞臺狭しと飛び廻り、大見榮を切るのが常といふ事例が少くない。わが榮三に至つては、斷じてかゝる出しやばりを犯さなかつた。老は一切の氣分一切の工夫を一旦消化して自家筆籠中のものとし、これをつくりその

まゝ移して、人形の魂に活かし、人間が表に出るより以上の情緒をかもしてゐたのであつた。それ故に、榮三はあの何となく臺灣の總督をしたことのある海軍の長谷川清元大將に似通つた顔のどこにも、自分の表情を示すことなく、心持歪めた唇を一字にぐつと引き締めるのみで、いは山顛の湖水のやうに漣一つも立てないといつた感じを與へるのであつた。「どうも近頃の若い遣ひ手は藝が荒くて」……とそれ以上は詳しく云はなかつたが、紋十郎などが人形の存在を壓倒するやうな華美で晴手な衣裳をつけ、舞臺一ぱいに大きな弧線を描いて動きまはり、猿廻しか何かのやうに好んで人形の後姿などを見物に示さうとして大見榮を切り勝ちで、いかにも得意げな仕打を老巧の大先輩として頗る危つかしく考へてゐたのに相違ない。

かいなまでの觀衆は、大形師が見榮

を切つたり、小手先を細か々震はせたりするさ忽ち釣り込まれて拍手喝采するが、思へば苦々しい限りである。榮三はかゝる主客顛倒を何よりも輕蔑したかのやうであつた。

「人知れぬ苦勞背纏ぎや陸の下駄」といふのが人並外づれて小兵であつた榮三の好んで書いた俳句であつた。大きな舞臺下駄を穿いて、當人は全くの無表情な顔をして、ちつと立ちつゞけ、人形の背骨をぐつと握りしめる時、遣ひ手の心は人形の中に移つて了ひ、淨瑠璃と三昧との響につれて、無表情な人形の方に却つて温い血が通ひ、魂なき人形が魂あるかの如く躍動するのである。かくて石地蔵のやうに全然無表情な二月堂の頁辨がちつと徐ろに杉の梢を見上る時、見物はその臉が動き、頬のあたりに血の氣がさすかのやうにさへ感じさせられる。これこそ一に藝道の極地が然らしめるものに外な

らない。

三

初め私は、舊友の人形劇研究家廣川清君の紹介で、榮三老と相知つたのであつた。その後は老が出京して新橋演舞場あたりに文樂の一座を統率する毎に、之と往來し、その木挽町の宿を訪れ、また屢々之と會食し清談を重ねるのを樂しみとしたのであつた。榮三の藝術の珍しい理解者今は亡き鴻池幸武君なども若々しい紺飛白の着流しで、老の宿に座り込んでノートをとつてゐる姿を一、二度ならず見かけたことがある。反對にこちらが大阪へ行つた時には、鑓谷の僑居を訪れたり、外で會つたり文樂の樂屋を襲つたりしたこともあつた。

河竹博士はもちろん、富田碎花、日夏耿之介、河合卯之助、前田多門長谷川如是閑、岡麓の諸氏が何れも

榮三と會談して、各人の心境と藝道の極地に味到しては、共に共に喜び合ふことが出來たのも今は楽しい憶出の種となつた。

榮三がすべて何の誇張も銜ひもなく、話してくれたことがあつた。藝の進歩を見るのは、いふまでもなく天分に加ふるに不斷の精進にあるがまた人知れず師匠や先輩、兄弟子などの演技な幕の陰からすぎ見ながらして、感得したヒントを胸に修め、修業を重ねておいた時、偶然豫期しない時に、その役割が廻つて來た機會を捉へて、豫て私かに磨いておいた自分の腕を試すことによるものが多いとよく話してゐたことがある。即ち、普通の芝居でもよくあることだが、主役の人形師が病氣その他急な故障で出られなくなつた時に、急に座頭の指圖で馴れぬ後輩のものに代役が振り向けられることがある。その時こそは、目頃かくした腕を見

せ、本當に自分の眞價を發揮するわけであるから、その時に失敗せぬことを考へに入れて、不斷から愈らす努めておくといふのである。

勸進帳の辨髪を遣つて四、五十分もの長い間、重い大きな人形を片腕で支へながら、ちつと起ち續けるの類は、全く人間業以上の大仕事と想はれるが、それも不斷の覺悟と努力と工夫とがあつてこそ、よく成功するものだとはいふ、酔つた時、口辭のやうに云つた所であつた。

要するに、黒衣で人形を遣つてゐても、あれは榮三だと感じられるやうでなければならぬといふのが、その本音であつた。黒衣はいはゞ無表情の極致に外ならないわけで、顔は卬じてゐても、黒ん坊であるつもりで自分の心情はこれを人形の肚裡に移して、自らを殺し、自らの力をすつかり人形の活躍の原動力と化すといふのが名人にふさはしい不立文

字の境地であつたらしい。

四

一度など東京に出て来た時、足の指の骨膜炎で悩まされたことがありそれを治すために私が屢々老を芝白金の傳染病研究所に同伴したことも

ある。友人細谷吾晋博士は一家を擧げて又樂好きであつた關係から、特に親切にして貰つたお蔭で色々の注射を受けた結果、流石の痼疾もすつかり根治することが出来た。老がこれを如何に喜び、如何に感謝したかは、自畫自賛の忠臣藏六段目の軸を表装して同博士に贈つたことによつても知られる。

ある時はまた上下の總入歯がいつもぐらついで、物を食べる毎にカチカチ音がして困つてゐたこともあつた。これは荆妻がお茶の水の高等齒科醫學校に度々件れて行つてすつかり根治して大いにこれを喜ばしたも

のであつた。私が足を治し、妻が齒を治してやつたといふので、榮三自身大いに感謝したばかりでなく、大阪の留守宅に残つた年上の妻女も大いに喜んだと見え、突然お禮をいはれば……さいつて老媪が後を追つて上京して来たことがあつた。

そこで私も夫婦が之を自動車に乗せて、丸ノ内を振り出しに東京見物を見せて東京驛に送つてやつたら二人でいそ／＼と下阪したことも今なほまさ／＼と眼の前にちらつく。

大阪では、松島で開業してゐた秋山久雄氏（廣川清君の令從兄）が主治醫として何から何まで面倒を見てゐられた。榮三自身も「親のやうにして下さる」といつて感謝してゐたが、終戦の年に大阪で老が罹災するや、仕合せにも榮三は秋山令室の實家に當る大和小泉の醸造元吹野家に引取られて靜養を續けさせて貰つてゐた。そのころ私は廣川清君と大和

岡寺の舊家松村家に一拍した翌日、同家の當主とも相携へて、奈良に疎開中の秋山周平を車道さし、榮三を小泉に見舞つたことがある。久瀧を叙し、お互の安全を祝も合つた後、序に慈光院を訪れて、有名な石州流の茶室を一觀して大阪に出たのであつた。大和路は青葉若葉に風薫る昭和二十年五月初めのことであつたがその十二月に急逝したのであるから私にとつて、それが榮三老との永訣となつて了つたとは、思へば果敢ないことであつた。

今年十月、私はまた大和に行き、辰野隆博士を案内して同じ岡寺の松村家に御厄介になつたが、はしなくも曾遊の小泉を想起しないではゐられなかつた。あの時、吹野家の離れ座敷に寄寓してゐた榮三老が私たちに會ふために、わざ／＼衣服を改めて二階の客間に出て来た律義さを思ひ出して無限の感慨に打たれ、榮三

の死は文樂にとつて桐一葉でなければいゝが危ぶんだことであつた。そしてその翌朝、大阪に出て何氣なく新聞紙を見れば、痛ましい哉、老の愛弟子、否、始ど唯一の遺弟子であつた榮三郎が月の廿四日、深草の疎閑先において腦膜炎で急逝したことが傳へられてゐるではないか。

この榮三郎は極めて温厚な上方人タイプであつたが、かつて糖尿病に悩まされたことがあり、同病に結核特效薬セフアランチンが効くといふので、東京興行の間に私自身、屢々これを同療法所に伴つたことがあつた。そして糖尿病そのものは快方に向つてゐたのであつたが、その後どうして腦膜炎など起したのであらうか。

私は師匠の榮三も最初は女人形を遣つてゐたのが、途中で男人形を遣ふやうになつたことを聞いてゐたから、そのうち女から男へ移るやうに

勧めたりしたことであつた。師の名を尊めぬ立派な弟子であつたのに、中道にして斃れたのは惜しみても餘りある次第である。光造はゐるが、これは直系の純弟子ではなく、縁にながつて預つた準弟子である。一代の名人榮三も思へば弟子運に恵まれぬ孤高の人であつた。(一一、一一夜)

榮三郎の死

大西重孝

文樂座の若き人形遣ひ吉田榮三郎は師匠榮三の三周忌も俟たずして急逝した。本名を西島留三郎といひ明治四十三年三月九日、倉敷の町で肴屋を営んでゐた武野浪太郎の三男として生れ、昭和十三年西島モツ女と結婚して西島家を嗣いだ。

父浪太郎が藝事を好んだので、早くから藤間流の踊りを仕込まれてゐ

たが、彼の十四歳の時(大正十二年)桐竹門造の率いる人形芝居の一座に加つたのがこの道に入る第一歩であつた。昭和二年三月道頓堀辨天座で假興行中であつた文樂座へ門造が復歸するに及んで榮三郎もまた吉田留三郎の藝名を以て番附の片隅に差加へられることとなつた。「炬燵」の伴勘太郎と「お七の半鐘場」の丁稚彌作の二役が彼のお目見得であつた。ほどなく彼の才能が認められて、その年の六月當時座頭となつたばかりの榮三の門に入り、名も吉田榮三郎と改められた。こゝに彼の將來の大成が約束されたのである。

榮三郎の名が世人の口にのぼるよろになつたのは「勸進帳」で榮三の遣ふ辨慶の足をもつてからだらう。

文樂座が四ツ橋に移つてから榮三は文五郎を向ふに廻して景事物にも非凡の腕を奮つたが、その際にあつて常に師匠を助けたのは踊りで鍛えた

榮三郎の遣ふ足であつた。榎茂都監
平の振付で新しい生命を吹込まれた
延年の舞は榮三獨特の間とイキこに
よつて豪快な舞となり、劇の進展に
つれて榮三郎の踏む足拍子が一ツ一

ツ異つた感情をリズムを持つてゐた
ことを私どもは聞いた。舞の終りに
近く数珠を頭上にふりかざして繊細
な美しい絃の調べとは逆に大きく左
へ廻るところがある。この件のカ、
リで先づ上半身の極りと同時に左足
を一つ上げて下す呼吸が、次に來る
べき右足から踏出して行く足の運び
にいかにも悠揚たる大きさを與へてゐ
たことが——。こゝに主遣ひと足遣
ひとの間に説明の出來ない阿囀のイ
キが通つてゐたことを知らなければら
ない。この足があつてこそ初めて榮
三の「勸進帳」が十八番として其後
も繰返し上演されたのである。また
「連獅子」「釣女」「三人片輪」「小鍛
冶」「出陣」など一連の新作景物の

企劃もこのコンビに於て成立したも
のさみるべきであらう。そして榮三
郎自身も後には師の遺跡を傳へた、
「三人片輪」の躰といふ傑作を残した
のである。

足遣ひとしての榮三郎の實力はた
だに景物のみに限られたものではな
い。榮三郎は足遣ひの興味を死ぬま
で口にしてゐた。なまじつかな役を
振られたり、左手を遣ふ位ひなら寧
ろ足に廻りたいとまで云つてゐた。
人形を生かすも殺すも足の巧拙にあ
ること今更いふまでもない。そして
榮三郎はこの間にあつて優れた舞臺
の間と呼吸を師匠から十二分に學
びとることが出來たのである。彼の
後年に於ける役々が人形操りの正し
い技法に叶つてゐたことはこの足の
修行が基礎となつてゐること疑ふ餘
地がない。

子役遣ひとしては「戀十」の三吉
が第一の當り役に擧げられ「近八」

の小四郎「鳥羽離宮」の小櫻などを
話題に残して、この道で當然踏まれ
ばならない順序を追つて次第に成長
して行つた榮三郎が、初めて大きな
意欲を動かした役は昭和十七年十一
月「十種香」で紋十郎の八重垣姫、
龜松の勝頼の中に狹まれて逝つた瀟
衣である。慎しやかなウレヒを見せ
た味ひの深い濡衣は多くの人の眼を
みはらしめたものである。この前年
には既に玉藏（後の四代目玉造）の
與次郎に對して「堀川」の傳兵衛を
遣ひ、やがて「三番更」の千歳や「太
十」の初菊「四季の壽」の鷲娘など
を遣ひ、更に技藝向上會では披露さ
れて「太十」の操と重次郎「賀の祝」
の櫻丸「十種香」の勝頼などそれら
立派な成績を擧げ、就中重次郎は因
協會から表彰せられ、「淨瑠璃雜誌」
からは蟻洞賞を授けられるといふ榮
譽を擔つた。

昭和十八年になると興行時間の制

限のために晝夜二部制がしかれることによつて若手の前に活躍の舞臺が開かれることゝなつた。その上に三業古老の死が相ついで起り、人形に於ても玉治郎が歿し、四代目玉造が膾炙血に倒れ、榮三、文五郎さへ漸く體力の衰へを見せてくるようになつて、遽に次代への道具替りのしらせが迫つたかのやうに焦燥の空氣が漂ひはじめた状態の下に、榮三郎は花形として一層重用せられるようになった。

この年から昭和二十年二月四ツ橋文樂座の最後の興行まで彼の手がけた當り役を擧げると、「寺子屋」の戸浜と「油屋」のお紺とは師匠榮三と同じ舞臺に立つて顔に脂汗して必死に勤めた思ひ出多き役であり、出陣から見せた「嫩軍記」の敦盛や「廿四孝」の勝頼は若男ものとして、「絹川村」の三浦之助や「吉野川」の久我之助は源太ものとして、また「佐

太村」の八重や「忠九」の小浪「樓門」の錦祥女「日向島」の糸繩「雪實」の中將姫の娘ものなどいづれも彼が樂しみながら遣つて、而も修行の正しい行儀のよい味ひの濃やかな藝を見せたものである。なほ右のお紺や小春のやうな新造ものゝ外にも阿古屋、夕霧のやうな傾城もの「朝顔話」の淺香や「引窓」のお早のやうな老け女形など一々擧げてゐては限りのないほど實に廣範圍の役々をこなすことが出來た實力の進歩は驚嘆に價するものがあつた。

朝日會館から再建四ツ橋文樂座へかけて人形芝居の復興に注いだ榮三郎の情熱はまだ大方の記憶に新しいところであるが、特に昨年十月よりつばめ、松、濱、市治郎ら若き熱に燃える太夫三味線の奮起へ呼應して人形陣を率ひて起つた若手向上會に於ける勾欄の成果は彼の生涯に最も特筆すべきものであつたであらう。

その第一回にはさきに師匠の代役で大きな經驗をつんでゐた「河庄」の治兵衛があり、稻荷森から通して遣つてみたいと熱望してゐた狐忠信は「川連館」で見せた。殊に忠信に於て人外の情の切なさをみせた感情表現の適確さ、段切となつて「此館へ引入れ〜」から縦横にふるつた人形振りの面白さは向上會隨一の收穫であつた。また第二回の「神崎揚屋」の梅ヶ枝についてはさきに箴諒「幕間」に詳述したところである。さらに第三回「酒屋」のお圓は先代紋十郎の流れを汲んで榮三が獨自の工夫を加へて完成したところを心憎いまで正しく再現したものである。

サワリのカ、リで「今頃は半七さん」を行燈をつかふことは勿論であるが、玉筋の藝のやうに「今の思ひに比ぶれば」を樞から降りて足拍子を入れるなどの派手さを嫌つて「わしやこのやうに思ふてゐる」までには

下に降りるべきでないとする師匠の教訓を固く守つて、屋體のまゝで右ひざに兩手を重ねて、節にのつた振りなど、家を忘れた夫に寄せる町家の若嫁の忍びやかな懊惱を見せて餘すところがなく、從來のお園の表現に對する一ツの反省を實地に示したものとひび得るのである。

榮三郎の人形はたゞ達者に手數だけを遣つたのではなく、つれに内に藏するものがあつたのは役の性根の掘下げが行届いてゐたからである。時には「堀川」の傳兵衛のやうに考へ過ぎて煩はしいほごな仕草が邪覺をすることもあつたが、概れ彼の掘んだところは正しかつた。また娘ものにしても傾城ものにしても若い人に似合はず華やかなところが少くて清澄な形容したい色氣であつた。また二枚目ものとするに特に師匠寫しの容姿はこれからの文樂には特に珍重されればならぬところであつた。

治兵衛、伊左衛門「河原」の傳兵衛、菅丞相、「天王寺村」の兵助「引窓」の十次兵衛、「忠九」の小浪、佐太村の八重、前述のやうに狐忠信などを好んでゐたのは、どうしても書出し時代の榮三の藝風を傳へるものでみたい。自信はなくとも「泥場」の園七を遣つてみたいといつてゐたし、「笑ひ藥」の祐仙、「白木屋」の丈八などの三枚目どころも懸落ちのない可笑味が期待出來たであらう。

文五郎の華やかにして屈託のない藝風に對して、澁い神經の行届いた榮三の藝脈は榮三郎の死によつてどこへ行くのであらう。

以上のやうに優れた才能をもちながら榮三郎のおかれた立場は必ずしも恵まれてゐたやうではない。やゝもすれば先軍の足許に迫らうとする實力の進歩と、自ら恃むところ強くして周圍に屈しない強い性格は時として榮屋内の妬視を買ひ、思ふとこ

ろに進み得ない彼は悶々の日を過すことも尠くなかつたものと想像される。或はこのために彼の死期を速からしめたかも知れない。

文樂に關する經營の問題は暫く措くとして、藝の上には近き將來に危機が來るとする見方が多いが、この間に處する彼の擔ふべき役目は大きかつた。彼もそれを自覺してひたむきな精進をつゞけてゐたであらうが今遽かに世を去つた。誠に哀惜に堪えない。しかし操史に残した若き人形遣ひ吉田榮三郎の足跡は明らかで大きいこと今更いふまでもない。

心安く冥福せよ、文生院瑞榮日照居士。

號報
一月特
坂東 三津五郎
豊竹 山城少椽會
尾上 菊五郎
谷崎 潤一郎
座談會
(イロハ順)

印象問答

坂東 箕助

北岸 佑吉

北岸 こんどは準備に手違ひが出来て急に無理をお願ひしたんですが、坂東 こんどは私はゆつくり見せて貰ふつもりで楽しんでみたんですよ。やつぱり出てゐると落ついて拜見できませんでした。

北岸 ほんとにすみませんでした。能舞臺で「關寺小町」を舞つてみて、如何でした？

「右 近 左 近」

坂東 いや、私のことなんか後まわしにしませう。私が何より感心したのは、私が出る準備をして鏡の間で待つてゐると、「右近左近」をとめた茂山彌五郎さんが幕を入つて來られて、先に入つて待つて

ゐられた大藏彌太郎氏に、實に慇懃に挨拶されたことです。たゞ息子でも家元への禮儀としてあんなに厳しくせねばならぬものか感心したのです。

北岸 實は、私もあとで聞いたのだが、あの入り込みの型は替の型なので、それを彌五郎氏が若き家元へ傳授されたのです。劇的な傳授場だつたわけですよ。

坂東 なるほど、それで感激のシーンだつたのですな。それにしてもあの引つ込みは素晴らしいものだつたやありませんか。

北岸 見付柱寄りに正向いて兩手をあげ、「おのれと左近とはめおとぢやいやい。笑へ、笑へ」と高く叫んで、そのまゝの高い調子で笑ふのかと思つたら低く「ハ、、、」と聲を落されたのは、まさに「コキユのなげき」の表現、ユーモアの中に哀愁が出て、非常な感銘

を受けました。

坂東 彌五郎さんのいゝところを、これほどよく出したものはないやうに思ひます。

北岸 あの笑ひを正面とワキ正と、橋懸りへ行つても一ノ松と三ノ松と重ねられたやうに覺へますが、あれも重複のわづらはしさを感ぜさせずに、ペーソスを積重ねた効果がありましたよ。それから、お白洲へ出るところ、實に素晴らしい描寫だと感心しました。

坂東 顔見世で先代萩の對決なんかあれだけの道具立てで三人數とてゐて、とても彌五郎氏一人の狂言には敵ひませんよ。

「長 局」

北岸 山城少掾と綱太夫の「長局」掛け合ひは實に珍し、聴きものでした。

坂東 私、あの時は樂屋で着更へなしながら聴いてゐたのですが、ち

つとも掛け合ひといふ氣がしなかつたのです。綱さんは私の地をやつて下すつたので、掛け合ひは急にやめになつて山城さんの獨演に變つたのだらうと思つたのですが、さて見所へ廻つてみたらやはり掛け合ひなので吃驚しました。

北岸 それは綱さんの大名譽です。

師匠と間違はれたなんて……。

坂東 お初一人の獨演になつてからは、さすがに落ちたといふ方もあつたやうですが、私は決してさう

は思ひません。

北岸 文樂で聴くより、人形さいふ

邪覽、さいつてはひどいが、いつも「山城を聴く會」でも思ふので

すが、純粹に義太夫だけを聴けるので、一層生々と響いて來ます。

それが掛け合ひだから、なほのと面白かつた。

坂東 同感です。

「殘 月」

北岸 僕、地唄なんかは、これまでゆつくりしみじみ聴いたことがないんですが、富崎さんをはじめ聴いて、あんなに明るいいものとは思ひませんでした。

坂東 たしかに、いつもの地唄と違つた感じでした。地唄といへば、

陰氣なところにサビの味があると

思つてゐたのですが、富崎さんの

には、しつさりとした中に晴れやか

さがある。

北岸 たしかに哀調だけのものではないことを知りましたよ。

坂東 氣障な言葉でいへば、詩がある

ともでもないふのでせうか。それを

普通ならば三味線に新しい王夫で

出さうとする人があられるわけですが

すでに、古來の曲には、ちゃんと

詩があるので、餘計な工夫に及ば

ないので。それを出し得るのは

今のところ富崎さんだけなのでは

ありますまいか。

北岸 それに富崎さんの唄も、實にしつとりした、それでゐて明るい聲です。大したものだ。

「菊 の 露」

北岸 しみじみとした味は、一般の

たゞ艶つぽさだけといふ踊の概念

では判らぬよさでせう。

坂東 極めてかたいものでありながら、ユーモアもあるので。さすがにお佐多師匠の京舞の長老とし

ての賞祿は十分うかゞはれました

北岸 お佐多さんは男ものゝ方がお

得意らしいですれ。

坂東 さうです。あゝいふものは年

とつた方でないと、若い人には望

めぬものがあります。

「長 刀 八 島」

北岸 大ぶん能に近いものですれ。

坂東 舞臺の使ひ方など、安心し切

つたものです。能に近いといふの

は井上流の傳統として當然のこと

ですが、私は長刀になるまでの方

に井上流の特徴が見られると思ひます。

北岸 はじめ釣棒を持つし、後は長刀、床几、また長刀と、目まぐるしいほど變化があつて面白いやありませんか。

坂東 他の人だと、あゝはキチンキチンと行かないでせう。居所などは實にびつたりしてゐました。

北岸 愛子さんの八千代襲名披露では、翁が實に素晴らしかつたさうですが、この八島を見ても、腰のしつかりした點は女流舞踊家は勿論、男にでもなかく、及びぬものと思ひました。

「關寺小町」

北岸 さて、あなたの「關寺」ですが、能からごつたものを能舞臺で演じて、如何でしたか？

坂東 これまで「關寺」は二三度舞つてゐますが、能舞臺は勿論はじめてです。一つのを演る度に

變へるのは、うち（坂東流）では喧まじく父からいはれてゐますので、こんども見た眼にぐつと變つてゐたさといふのを避け、前と同じ心でかゝりました。しかし何といつても舞臺が違ふのですから、前夜は徹夜して工夫したのですが、靈がうまく行かなかつたりして不安心で、自慢できるほどのものはありません。

北岸 この前、朝日會館で拜見したのをよく記憶してゐるわけではないが、こんどは能舞臺だし、語りかきの地で橋懸りを出て來られるところなど、全く能を見てゐる感じで結構でしたよ。それに顔のつくりが大へん成功してゐました。坂東 あれは能面の瘠女と小町老女の寫眞を見て工夫しました。それに幾分姥の氣分を入れたのです。裝束も厚板ださ感じがゴツクなるので腰巻を着たのですよ。

北岸 主に目付柱を中心に舞ひましたね。

坂東 關の清水に影うつす、さいふところなど、もつと出て、金春流の「芭蕉・水月之傳」を眞似ようかと思つたのですが、正先ではあまりなので、三步返つてやりました。そこらが苦心したところで、北岸 深草の少將がついて物狂になるところがよかつた。

坂東 少將の物の化がついて若い小町に變り、正氣づくにつれて、又老けて來るつもりでやりました。變るさき、額で隈を加へたつもりですが出來ましたかどうか。それからこれは「關寺」ですが、「卒塔婆」も入つてゐるのですよ。いつの間にかは衰へし、の本筋の次のところ、因果はめぐるへのカ、りに杖と三味線の合ふところがあります。これは彌七さんの糸でうまく行きました。

北岸 とにかく、この「關寺」は裝束助さんの賣りものですよ。



観照十號の三津五郎藝談「荒事の心得」につき次項の通り訂正申込が大和屋からありました。(文責者)

◆ 荒事の手の指がまむしになるといふ記事は間違ひです。あれば手の甲がまるくなるので、指はやはりそります。今の若い人のば掌が板のやうになるのがいけないのです。(坂東三津五郎)

◆ お園、小藤と大谷廣太郎の躍進目醒しいものがある。わづか二ヶ月で若女形として芝翫梅幸と天下を三分した。自分の不勉強を戦争にかこつけてゐる方々、廣太郎は七年間兵隊にさられてゐたのですが、これは一

體どうなりますか。(猛血公)

◆ 天下の三分は坂東鶴之助のために少しは残してをいて下さいよ。(後援會幹事)

◆ 諏訪根自子のソナタの夕を聴いて感心した。フランクのソナタにあんな若々しい輝きを與へた提琴家は今までになかつたらう。彼女の間は日本人特有のものだ。而も演奏中息をつめてゐて、吐く息が一つもなく、とる息ばかりなのには驚嘆した。原智恵子のフランク解釋が從來のフランクの晦澁さへの迷信から少しも脱却してゐないのと比較して、諏訪の天分の豊かさが知れよう。ドビュッシーの地獄を覗き込むやうなソナタをあの若さであれ程までに弾いたのも偉い。ベートーヴエンを弾かす日本樂壇の低さが情ない。(義政軒)

天津乙女の「船辨慶」もよかつた。彼女の唐織袴での舞や後の腰の確かさ等先づ六代目に次ぐものである。それだけに長唄の折の振り、言ひかえれば六代目の忠實な模寫の域を出ぬ、歌劇は歌劇の「船辨慶」としての振付をなし得ぬ寶塚の演出陣の貧困さよ。(江藤讓二)

◆ 「藝術祭」つて一體何んだつたのだらう。芝居の看板の隅つこに「藝術祭参加作品」と書かせただけでおしまひだつた。(喜の字)

◆ よきものを、たゞかうんと安く、平生は縁のないやうな人々に與へる——つまり昨今やつと話が動いて來た國立劇場運動の臨時的な實現といつたところが藝術祭のれらひと思ふんだが。(結城 致)

◆ 世間ちや誰も知らなかつたが、大

阪では藝術祭式能があつた。内容は正直に言へば見たいものではなかつたが、大阪では二十年來絶えてなかつた、翁付の本格五番立の能組だつたさうだが收穫です。(彌の字)

觀世流と能樂協會とで破門と決定した梅若流を、五流能に引張り出した朝日新聞の横車も問題だが、いつもながら長い物にまかれる式の能樂師根性にもあきれれる。(氏家巨美)

ナニこれは實生重英の陰謀サ。華雪が朝日側の交渉に對し、協會を信頼して理事長一任と返事した處、重英理事長が承諾したといふ譯だ。重英にして見れば、目ざす敵の觀世流が動搖するほど有難いさうな次第なのサ。(義政軒主人)

理事長辭職なんてなまぬるい。重英よ、家元も辭退せよ。(九郎)

ついでに家元制度なんか廢止してしまへ。(實)

そうだ、そうだ。(伴馬)

こりや何を申す、その方達が名人だなどといはれてゐるのは誰のおかげだと思ふ。(觀阿彌清次)

當流では早速宗家制度の改革を發表いたしました。宗家と家元を分離し、宗家は象徴的存在として六郎が納りますが、流儀の統率者たる家元は世襲でなく公選といふことに致したのでございます。(六之字)

實はネ、一家兄弟の他に人がゐないんだから、公選とはいへ、六之丞先生より行きやうがないし、どう間違つても兄弟の中の誰かだから安心なのサ。(老松)

然し東京の朝日能で金儲け第一主義にも困る。大阪の朝日會館なども心ある藝術家の鼻つまみだが、これでは朝日も近頃問題のゴロツキ新聞と選ぶところはなけれ。(猛血公)

會館能では大潮さん大分人氣をとりやはりましたんやで、あゝそれなのにそれなのに。(能樂組合)

會館能と死ぬ角も因縁深かつた金春流大鼓の森利夫が梅若の小西康夫の内で死んだ、晩年不遇のこの人を職分の數氏が順々に面倒を見ることになつてゐたさうだ。四面を歌の能樂界にも嬉しい話はある。(卿)



劇

評

「王將」の成功

歌舞伎座の新國劇

割られた盤面をつぎ合はせ、食事
を知らせに來た子供に「父ちゃん
阿呆！」といはれるのも耳に入らず
夢中で駒をにらみつける第一幕。娘
の口から齒に衣きせの意見を浴びせ
られ、嚇ツとなつて殴りかゝるのを
弟子達に押へられる第二幕。妻女と
しみじみいたはり合つて、壺坂の淨
瑠璃を低唱しつゝ居睡つてしまふ同
第二場。遠く亡妻の枕頭につながら
電話に向つて南無妙法蓮華經を唱へ
る第三幕。——盛り上げて來た舞臺
を溶暗のやうに靜かに流す幕切れの
印象が何より深かつた。

北條秀司作「王將」は對局を陰に
置いたり、主人公の成功と對蹠的に

落ちぶれた友人との邂逅で筋を運ん
たり、手法の上には格別の新しさが
あるわけでないが、大阪が生んだ大
阪らしい天才を描くのに成功した、
近來での佳作であつた。

肉體的には似るさころの少い辰巳
が坂田三吉の人間をまた巧みに出し
得たのは「だんじり囃子」から「ぼ
んぼん」を経た北條、辰巳のコンビ
の成功である。東京での初演をすま
せて來たものだけに、八年ぶりにこ
の劇場への歸演には何よりの手土産
といへる。大阪の街の隅にはどこで
でも見つかるとやうな親仁、それでゐ
て一つの道に憑かれた人物は、辰巳
にとつて難しい役ではなかつた。彼
自らの着想企劃といふだけあつて、
役への喰ひ込み方も一入で、自分の
將棋への懷疑に堪へかれ、深夜の物
干臺で團扇をたゞき、お題目を唱へ
る最高潮場面も、よく似た「無法松」
よりも自然であつた。たゞ「だんじ

り囃子」の老友と同じく、臺詞の發
聲法の可笑し味に頼ることを警戒せ
ればならぬ。

この劇の成功には何より紅梅の特
別加入を得たことで、その娘が父を
激怒させるまで悪態の忠告をするこ
ころは、彼女の出世藝だつた「彦六
大いに笑ふ」の女給の好演を思ひ出
させ、恐らく東京でのこの役の小夜
にまさること數等かと思はれる。外
崎の女房も懸命だが、年齢的にも無
理があつた。石山の新吉も好演。

紅梅は島田の「一本刀土俵入」に
お薦をつきあつてゐるが、これには
潤ほひが足りなくて失敗した。島田
の茂兵衛は演技の細かさに自己満足
の危険がある。

「極附剛定忠治」はもはや新國劇の
獨參湯として再々の上演だが、昨年
島田が試みた新演出も失敗し、全く
歌舞伎的の型物化した澤田のまゝの

〔以下25頁下段へ〕↓

(能) (評)

能

塚

實

前日は観世鏡之丞氏の「鉢木」言葉に終始する曲にも拘らずマイクが不調、近代劇場として最も關心をもたる可き所に不注意だつたのは責任問題である。シテは例により本格強行で、薪をワキの前に持つて行く間が荒かつた外は結構、殊に後の出の境遇に動じない常世の儼然さは清爽だつた。ワキの福王茂十郎氏、位は充分であつたが、中入で足早に橋がかりに行き二の松でふりかえり「披露の宴になり申さん」とシテに指したのは型の爲めの型で不合理的。「道成寺」は上田隆一氏で赤頭、三度目だけに落附は見えたがそれ丈に緊迫感が薄らいた。道行の伏線の氣魄も浅い。亂拍子も鐘入もする事げ出来てゐるが氣のゆるみは致命傷である。ワキは高安滋男氏、態

度は立派だが語りで「おつかくる」と前に出るのが若いのが「こゝかしこ」と下を見るのも型としてもつて前方であらねばならぬと思ふ。しかし他は上品であのけば／＼しい色彩がそぐはなかつた程だ。小は中川隆夫氏、地は鏡之丞氏、共に快適。

後日の「小督」恐ノ舞は片山九郎右衛門氏、常は中途でひく作物をそのまゝにしたのは劇場の廣さを考慮した新演出で、私共保守派に見られてゐるやうだが、こんな事は大賛成である。シテは萬事無難といふ程度であつた。

観世喜之氏の「道成寺」は申之段數齣と五段ノ舞の小書、前日の無感動な道成寺に對して恐ろしく執拗な性格をもつて、殆んど色なしとも見える程の唐織がかえつて下懸風の演出とマツチして非常に効果的だつた。

亂拍子は田鍋惣太郎氏の小鼓で短い段であつたが充實して、急ノ舞は五

段を鮮に舞つた。鐘入は關西のよりは少し高い目の鐘に手をはなして飛んだが、下にいつた一瞬氣合が亂れたやうであつた。鐘が上つた時は、思ひきり兩手をひろげて唐織を腰にまいたがこれは美事で、舞臺も大きかつた。斬り各段グツグツと押して鬼氣迫り、幕際でふりかえり大きく拍子を踏んだがこれがよく利いて、追に舞臺を心得た人だと思ふ。ワキは福王茂十郎氏でシテの積極性を強く受けとめて火花を散らすやうな氣合で、これ丈でも樂しめるものがあつた。(一〇、一〇一—實塚大劇場)

會

山本勝一君の「放下僧」を見て同君を今日程凛々しく感じた事はない。面も緊り、腰もきまり、たしかに一轉期を畫したと見ることが出来た。

山

本

能

樂

山

勿論部分的には語のキツバリしないのや「金龍を」と、

とんとんこつく杖が眞直でない等あげればならぬが青年ら七い潑刺さか何よりよかつた。ツレの眞義君もその眼光にたくましさを見せ、兄弟共に大出来だつた。梅若六郎氏の筈が例の問題のために「實盛」は急に片山九郎右衛門氏に變つた。これは大いに見所の失望を買つた。それ丈に片山氏に多くを望んだが先づ急の代勤の不利はあるとしても片山氏近來の失敗作。剛健の古武士の風格なく首筋の淋しさ、腰の單なる老人ぶりそれに後は間伸び地の温健すぎるのと相俟つて實盛らしからぬ一曲だといはればならぬ。ワキの福王氏も何さなく氣合が合ひかれるもどかしさがあつたやうだ。「花簞」は簞之傳で山本博之氏、シテは積極的内容を盛る行き方であつたが、如何にせん、地はわれ關んせずと、あたかも三番目物のような具合でかくもシテの意欲を無視したのも珍らしい。大體

此の日の觀世三番の地はいづれも無氣力、近頃の一番悪い傾向を見せてゐたのは戒心を要する。それ丈に切の「船辨度」は一際光彩があつた。シテの金春光太郎氏は謠が餘り氣にならぬ程、情に於てすぐれ、殊に小書遊女ノ舞は五段で、これが又艶麗である上に曲の要求するうれひが充分含まれ、四段で橋掛に行き、シテ柱先で扇をかざしてそのすき間から舞臺を見、終つて柱に扇をあてゝシタル、この風情は可憐極まりないものであつた。小書として成功した演出の一つであり、又それを生かし得た演者でもある。中入前の「涙にむせぶばかりなり」のシテはまるで新劇的、自然描寫で、それが少しも異相でないのが面白い。後は一見驚異を覺えた。かくも怨靈たる知盛の出現は稀有に屬する。觀世を始め他流の多くは凄さもあり、氣魄もあるが、それは往々にして生色を帯ぶこ

とである。金春氏のやうに、足さはず、面をきる折の速度姿體總てに亘つて人を感じさゝぬものは珍らしい、此の意味で前もよかつたが後は絶稱するに躊躇しない、それに地が金春榮治郎氏と信高氏でよくシテの氣を受け錦上花を添ふるものがあつた。觀世本流の會に於てかくも名をなさしめた所に考へさゝれる何物かがある。――一〇、一七大觀能樂堂

(沼 艸雨)

人海と寺成道

一 謹之輔翁二十五年追善能に令孫滋夫氏は道成寺善を披いた。父君巖氏は廿五歳で披いて還曆を過ぎた今日まで四十何回か舞つてゐる。それよりも一

二年早く披いた滋夫氏が道成寺役者の後繼きとして期待し得る披きであつた。大は廿一日急逝した谷口幸治郎氏でこれと同月廿六日觀世例會での「歌占」が幸治郎氏の

最後の舞臺であつた。小は田鍋惣太郎氏。鐘引きは巖氏が當つた。

脇は高安滋男氏、可なり重みがついて來た。シテもこれに負けず、幕離れた姿は危氣なしといふ感じで、脇も確かりしてゐた。面は若曲見。背がやゝ丸いのが氣になる。物着して二ノ松からの鐘の見込みがよく利き、亂拍子の足も練習の効が見えてゐる。急ノ舞で烏帽子を裕々とはねとばし、鐘の下へ一步踏んだかと思ふ途端に落ちる鐘に飛び入つた。脇の語りは終りの方が少し粗末になつた。後ジテは裝束着もソツなく、隣落しの後、柱巻きはしなかつたが、角の威赫もよく利き、無事に幕へ飛び入つた。披きとしては成功といはねばなるまい。

巖氏の海人は珍しい「八講」の小書つきである。前は一セイのあとサシ以下抜けて問答となり、常と變らぬ玉ノ段は目せはしく舞ひのける。

後は脇が花の蓮の妙經を拜禮し、色

色の善をなし給ふで太鼓頭、千方が

寂寞無人聲を誦ふと二段返しの出端

となり、龍戴、緋大口のシテが左に

經卷を持つて出る。あら有難の御經

やな以下普通の掛合だが、今この經

と千方へ經卷を渡し、さてこそ志度

寺と角とり、この孝養と承るゝ廻つ

てから早舞となる。可成り緩急の面

白いもので、舞ひ上げて、御法の夜

聲更けすぎると語り、返しを地がう

けて、歌舞音楽も時移れば、以下常

にない話がついて舞が續き、この八

講の功德とかや、と大きく打合せ合

掌でとめさなる。珍しいとはいふも

のゝ、剛に變哲のないものであつた。

金剛氏が春以來、種々試みて來た珍

しい小書の復興は本年として注目す

べき業績だが、これなどは單に追善

の形を濃くするだけで、必ずしもヒ

ットばかりではないやうである。

(十月十七日所見) 北岸 佑吉

小書能の王座を占める、

「定家」二式之習を金剛殿が

勤めた。墓之囃子・引導・

五輪碎・袖神樂・露之紐解

・六道・二段半之舞・鉦之

留の八つの習ひが演ぜられ

たが、平物のやうなあつて

習の一式家定

一能會玄幽

「定家」二式之習を金剛殿が勤めた。墓之囃子・引導・五輪碎・袖神樂・露之紐解・六道・二段半之舞・鉦之留の八つの習ひが演ぜられたが、平物のやうなあつて

ない印象を與へた。

最もよかつたのは、墓の囃子で作

り物を一週して大小前へ出て下居し

次にワキへうける迄の、ほんの二三

分の間だけであつた。これは笛柱よ

りの方から作り物の裏へ廻る時に、

シテの半身も作り物に聞えた失敗の

爲に、シテが緊張したからだらう。

心理的緊張が能面の表情にまで現は

れる處に藝の恐ろしさがある。巖の

能の缺點は、このやうな内面的な表

現の怖さを知らぬところにある。之

は巖がなまじ物識りであるからだ。

まづこの悪性インテリ病を治されば

藝者の手踊りのやうな能の境地から

永久に脱し得ないたらう。——一、
八、金剛能樂堂——(武智鐵二)

鉢木と樂阿彌

一 禪 拙 會 一

金春光太郎氏の直面部に
はいつも意外な印象を受け
る。これも他では思ひもよ
らぬ感銘があつた。奇怪な
といはれる氏の首聲や風姿
が巧まざる常世の表現の掇
けとなり、落魄の境涯にありながら
貧に屈せぬ氣概を藏するのを感じさ
せた。降つたる雪かな、の出から仰
々しくもなく、鉢木の雪も作り物か
らやゝ離れて拂ひ、柴をさる時は直
裁的に思ひ切りよく兩手を突込んで
ぐつと抜くなど、こせつかぬ大様な
型で、さもすれば情趣にのみ沈み易
いこの能を力強いものに表現した。
脇の岡治郎右衛門氏も位十分で、
特に中入前に、さらば常世と見下し
たところに大きいものがあつた。ツ
シの欣三氏は父君をつくりの運歩な
ごしながら謡が出来てあらず、詞が特

にまづいのが氣になつた。

「樂阿彌」といふ狂言は能もぢりの
構成で、それを眞面目くさつて能が
かりに演ずるところに皮肉な面白さ
があるのだらう。茂山彌五郎氏の藝
風は特にそれを感じさせ、脇僧の松
田逸堂氏も松本謙三氏の如き風格を
覺えさせ、二人が作り物に相向つて
口尺八を奏するあたりしんみりした
味があつた。ところが一月後、京都
の狂言會で見た忠三郎氏の同曲では
脇僧が千作翁であつたし、演技は狂
言の詩を超えず、あくまで狂言らし
く演じたのと比べて、それぞれに面
白く思つたことである。

なほこの日、川崎九淵翁が大倉正
二、三島太郎、森田光春らの若手を
指導しつゝ打つた「石橋」の居囃子
は、謡に榮治郎、信高兩氏が揃ひな
がらのきこちなさを吹ッ飛ばして素
晴らしいものであつた。(十一月十
一日、於大槻能樂堂) 北岸佑吉

井筒と砧

一 山本能樂會 一

華雪氏の改名以來はじめ
て關西で見せた「井筒」物
著は待望を滿たすに十分で
あつた。桶がりの奥の方
の欄干に寄るやうに出て來
たのは偶然か意識的か、こ
のシテらしいと思つた。後向きにな
つたとき、脊のまるさに晩年の万三
郎の面影があつた。中入せず物著し
井筒に左腕をかけて見込む型も情趣
深かつた。

橋岡久太郎氏の「砧」は梓の出、
右肩脱ぎかけて立つた姿は歪みなく
すつきりしたもので、謡もいやみな
く響き、砧ノ段で、ほろ／＼と二打
ちし、はら／＼で打たずに砧にのせ
た扇をすべりおろした風情は氣持よ
かつた。後は白大口に白坪折で瘡女
をかけ、清楚のうちに妻みを出し、
胸の煙の煙に、のあたりの恐怖の情
が、やがて次第に譯まつて行き、拍
子を踏ますに留めになる。これも會
心の一曲だつたであらう。(十一月
二十一日、於大槻能樂堂) 北岸佑吉

井上八千代の鷺娘

武智 鐵 二

十一月十六日から九日間、新装成つた八坂俱樂部で、四世井上八千代藝名披露の舞踊會が催され、三の替りまで三十番に近い作品が發表された。京舞井上流の座敷舞には接する機會が多いけれど、舞臺の舞は近年殆ど觀る事を得なかつただけに、ここに有意義な會であつた。殊に古格を守つた振が多く見られたことは井上流の主張を知る上にも、又古い操り芝居の型などを覗ふ爲にも、大變勉強になつた。

由來井上流は人形の型をとり入れて創成されたさ聞き及んで来たが、それが操芝居の直輸入といふ意味でも、所詮人形ぶりといふやうなまやましいことでも、ないといふことが、今更しみると會得された。座敷舞などでは能の影響や、座敷さいふ特殊な環境のために、少し去勢されたやうな趣きがあるが、舞臺の舞を見るとなか／＼殿しい主張を持つた古典藝術である。まづ舞手は何よりも人形になることを要求される。素材たる人間の特殊にたよつて、表現それ自體がおろそかにされるやうな、甘い藝術上の抜け道は許されない。この様式の統一と表現の制約との上に、古典的に修練された技術と手段に、息と間とを基盤として、形容を通じての人間の再現が企圖される。かくして藝術の眞骨頂たるこの、古典的規矩を通じての人間の眞實の表現が茲に生れ、又そのための修業の途が、藝術家の爲めに遠くはるかに、然し正しく展かれるのである。

その意味で井上八千代の「鷺娘」は注目に値したし、恐らく本年度の舞踊劇の最高位を占めるものであつたと云へよう。「身は瀟灑の」こ「ちよる／＼水の一筋に」とで、作り物の聲を分けて前へ出て、兩の袖を前にはた／＼と重れる息と間との鏡どさから、地上に舞ひ降りて羽を休めた鳥の生態を心憎いまでに描き出したが、これも流れ足の技巧から鳥の飛翔感にまで追ひつめて、他流の鷺の如く手を羽根の様にバタ／＼とすなまな寫生からではなく、眞の寫實の精神に徹したればこそ、その成功を収め得たのである。まして賣の段になつて、超人的なそりかへりの技巧の連続から、鷺娘の人間の苦惱へ直結せしめた表現の如きは、凄絶と

四代目坂東鶴之助後援會

會員募集

事務所 大阪市南區道頓堀

中座前 白水喫茶店

第一回後援觀劇會ヲ新春ノ中座テ行ヒマス、入會御希望ノ方ハ至急前記事務所迄御申込下サイ

言はうか、悲壯と云はうか、偉大な舞臺藝術であつた。

八千代は他に翁、八重桐、羽衣の漁夫を勤めた。元老佐多は羽衣の天女を舞つたが、この足の弱つた老軀の大口が少しも搖れないのは、千歳三番更を勤めた中堅連の腰がフラフラしてゐたのを對比して、興味があつた。佐多は「粹」を舞つたが、これは鶯娘ほどの内省に缺けてゐた。

若手連では井上里春の「狂亂」がよかつた。天分に限りのある藝術家が、如何にして自分の藝を立派に見せるかといふ、藝道修業者の最も正しい筋道を歩んでゐる點を買ふ。然し人形から取つた肩で息をする技巧が、里春では機關車のやうな感じになつてゐたのに、井上屋壽榮の「槐久狂亂」ではちゃんと人形に見えたのは、やはり昔の人程技術が出来てゐると思はせた。ところが八千代の「八重桐」を見ると、同じ技巧をも

つと自然に、少しも人形らしくなく——といふのは、名人の遣ふ人形のやうに——してゐたので、上には上があり、修業の道は極まらないと思つた。それともう一つ、井上流の足を後へ蹴り上げるやうな揚げ方が、人形の裏向きの時などの襪の効果を出すためのものであることに、これは「鶯娘」を見てゐて氣づいた。

他の名取連、上手なのも下手なものも居るが、どれも少くとも十數年以上は、この道で苦勞してゐるところは視へた。その點他流の名取のやうな醜いこまはない。花柳界のやうな——殊に祇園のやうな、封建的なところ、正しい修業の筋道が残つてゐるといふことは、今後の古典藝能保存の道程に對して大いに暗示的なものがある。

名取ではないが、舞妓の美代子の「十二月」がよかつた。恐らく現在の井上流で、八千代を除くと、この

少女が最も天才的な息と間を保持してゐるであらう。然しこのやうな天才を如何にして完全な藝術家に育てて行くことが可能であるか。まことに困難な問題である。

↓〔18頁ヨリノ續キ〕

演られた演技で辰巳以下樂々と翹をのばしてゐる。しかし赤城山中での刀の場面と小松原の極めて短時間につぶめた殺陣だけでこの劇の生命は盡きてゐて、あとは今日の觀照に堪へるものではない。

中野實氏書きおろしの「女看手殺人事件」は眞犯人をほゞ判らせておきながら解決まで引つ張らうといふ流行のスリラーをわらつた推理小説劇だが、時代錯誤的な兄の仇討にしたところ、見物よりも主役の島田潮検事を戸まどいさせてゐた。(北岸佑吉)



Zedrin-tab

» Takeda «

去 除 感 勞 疲

進 增 能 力 業 作

去 除 氣 睡

起 振 意 欲 動 活

劑 覺 醒 腦 頭

錠 錠 ド リ ン ゼ

製造發賣元 武田藥品工業株式會社 大阪市道修町

谷口幸治郎氏

石井流大鼓

家元代理として斯界に確固たる地位を占めてゐた氏は急病で十月三十一日五十五才で逝去した。關寺、楡垣、姨捨、鶯鴨、卒都婆等秘曲全部を勤め、そのいづれもが記憶される成績を残し、これからは内的充實に向ふものとして内外より期待されてゐたのに残念な事である。謹んで弔意を表する。

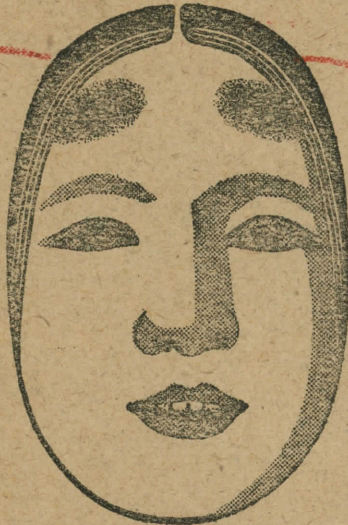
森利夫氏

金春流太鼓

の同氏はかれて病氣靜養中であつたが、去る十月十三日逝去された。六十二だつたと思ふが、壯年期は野心満々として各種の權の企劃に參畫して、時としては誤解を受けた事もあつたがその熱はよく大阪能樂界に寄與する所大であつた。

十二月二十三日大阪念佛寺で慰靈祭執行と共に手向け囃子會が家元惣一氏を始め友人諸氏によつてなされた。

發行所 大阪市東區道修町二丁目十一 林 秀雄方 觀照社 定價 一部 金拾五圓



男 女 兩 性
に 作 用 有 効

プレホルモン

四肢冷感 母乳分泌促進 注射・錠劑

大阪・東京 塩野義製藥株式会社

編集後記 文樂庵ではこのとこ

ろ道八と津大夫の記念興行が續いた。人形の名人榮三のものやがてあるだらう。本誌ではその三用忌に當る今秋、湖池幸武氏と榮三を併せて記念したいとの計畫を立てたが、都合で湖池氏に關しては暫く待ち、本號は榮三の靈に捧げ、併せて榮三郎をも追憶することにした。榮三に關しては論壇の權威たる喜治隆一氏が朝日新聞社出版局長としての多忙の中を特に追憶記を寄せられたのは本誌の喜びであり、故人への何よりの手向けであらう。口繪の寫眞は湖池氏の遺品中から珍しいものを選ぶことが出来た。榮三郎の寫眞はその最後の舞臺で三村幸一氏の撮影にかゝる。本誌主催の名流藝能觀照會は有意義な成果を收め得た。少し手違ひで谷崎先生に御迷惑をおかけし、諸氏の期待にも背いたが、近く谷崎先生の御寄稿を仰ぐことになつたのを報告して、お詫びと、手違ひの埋め合はせにしたいと思ふ。